

滑川市早月加積地区／清流の里めぐり 2014年8月15日

10. 公民館活動



■住民の郷土愛育む

「えー、今日は、公民館主催の事業に参加いただき、誠にありがとうございます」

バスの車内に、早月加積地区公民館の館長、松井博文さん（66）＝滑川市四ツ屋＝のあいさつが響く。少し緊張しているようだ。

8月上旬の週末、同公民館主催のツアーに参加した。地区の神社や寺を巡り、歴史を学ぶ初のイベント。朝、地元の親子連れら約20人が公民館からバスで出発した。

引率する松井さんは4月に館長に就いたばかり。富山大職員として37年間勤めた後、

声が掛かった。「地元の役に立ちたい」との思いは強い。今回、ふるさとの歴史を学ぶツアーを職員と協力して企画したのは、自分が暮らす場所以外の町内にも関心を持ってもらい、交流を深めるきっかけになればと考えたからだ。

バスが最初に着いたのは大掛（おおがけ）にある神明社。待っていた住民に鍵を開けてもらい、特別に中に入れてもらう。

「壁に掛かっている古い絵馬は源平合戦ですね。一ノ谷や屋島の合戦の代表的な場面が1枚の中に描かれています」

「ここは昔、早月川の支流が氾濫して大きな崖ができたことから、大掛という地名になったそうです」

解説役として同行した滑川市立博物館の学芸員、近藤浩二さん（36）が説明すると、参加者から「へえ」「ほお」と声上がる。大人も小学生も興味が湧いてきたようだ。

追分の富士神社では、宮総代で氏子代表の中山哲夫さん（70）らが、祭られている神や神社の歩みを紹介した。ツアー第1弾のこの日は、全10町内のうち、5町内の計8カ所を見て回った。

お昼に公民館に戻り、皆でそうめんを食べて終了。最後に参加者が感想を書いた。「近くに住んでいたけど行ったことがなかった。良い勉強になった」「町内名の由来が分かった。面白い」…。

1枚1枚に目を通した松井さんの顔に笑みが浮かぶ。

「住民が愛し、住んで良かったと思ってもらえる地区にするのが公民館の役目。裏方として今後も頑張りますよ」

地区の拠点、公民館が携わる行事は秋も目白押しだ。

■遠望近信 深井あき子さん（76）東京都文京区、華道・茶道教授

小学2年生の時に終戦を迎えました。当時は先生と言っても代用教員で、勉強らしい勉強もなく、天気がいい日は早月川沿いの林へ遊びに行ったものです。砂浜と松林が広がっていた自宅近くの海も遊び場でした。丸太を浮き代わりに兄と沖まで泳ぎ、カキを捕るんです。地元の海の眺めがいまも好きで、帰省すると真っ先に見に行きます

東京では教え子たちもよくしてくれ、生活も何かと便利です。でも、最高の場所はやっぱり生まれ育った古里。いくつになっても変わりません。（旧姓八倉巻、三ヶ出身）